

第177回 日文研フォーラム



僕はこの暗号を不気味に思ひ…

芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気

“I Felt Something Ominous about This Coincidence…”

Ryunosuke Akutagawa's “Cogwheels,” Strindberg and Insanity



マッツ・アーネ・カールソン

Mats Arne KARLSSON

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もとこ

● テーマ ●

僕はこの暗号を不気味に思ひ…

芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気

“I Felt Something Ominous about This Coincidence…”
Ryunosuke Akutagawa's “Cogwheels,” Strindberg and Insanity

● 発表者 ●
マッツ・アーネ・カールソン
Mats Arne KARLSSON

ストックホルム大学 助教授
Assistant Professor, Stockholm University
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2005年2月8日 (火)

表発者紹介

マッツ・アーネ・カールソン

Mats Arne KARLSSON

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

略歴

- 1991年 5 月 ストックホルム大学 社会人類学・英語・日本語学科 卒業
2001年 11月 ストックホルム大学大学院 日本学科日本文学専攻 博士課程修了
2001年 11月 ストックホルム大学 Ph.D.
2002年 5 月 ストックホルム大学 助教授

著書・論文等

「中上健次とフォークナー」『早稲田文学』11、2003

The Kumano Saga of Nakagami Kenji, Akademitryck, 2001

“Narrative aspects of Akutagawa's *Yabu no naka*,” *Japan and Korea in a Nordic context*, 2000

“Avtryck i Japan: Strindberg i Akutagawas skrifter,” *Strindbergiana* 11, 1996 (A comparative study on the influence of Strindberg on Ryûnosuke Akutagawa)

“Citronen” *Halifax* 10, 1996 (Translation of the short-story “Remon” and introduction to Kajii Motojirô)

はじめに

一九一七年一月十二日、芥川龍之介はアウグスト・ストリンドベリの『地獄』を読み終わったところでした。この小説はあたかも作者自身の地獄的体験を忠実に述べることを目的としているかのように書かれています。この本の結語は作者による読者への誘いの言葉で締めくくられています。「本書を創作物だと思われる読者には、一八九五年以来毎日つけている私の日記をこら¹ん下さるようお願いする。今諸君が手にされる本書は、その日記の拔萃を増補し整頓したものに過ぎないのである。」芥川にとつてこのストリンドベリの誘いは全くの蛇足だったようです。なぜならば、芥川がストリンドベリの告白文を真実の体験の表現としてそのまま理解したと思われる理由があるからです。小説を読み終わったあと自分の『地獄』のブックカバーの内側に次のような言葉を書き留めています。「この本をよんでから妙に Super Stitious になつて弱つた。こんな妙なその癖へんに真剣な感銘をうけた本は外にない」と。²

この中で注目をしたのは、「真剣」という言葉です。今日の講義はフィクションと現実との関係を扱うものではありません。つまり現実を忠実に書き表せるか否かということについてではない訳です。また、芥川がストリンドベリに影響を受けた、これは疑

いのない事実ではありますが、そのことを証明しようという試みでもありません。どちらかというとフィクションを読むのに伝記物を読むときの読み方を用いたために起こる不思議な結果についてのことなのです。すなわち、フィクションを現実の表現と見なし、て読んだときの結果についてお話をしたいと思います。

『地獄』を読んで一〇年経った後、芥川は自分自身の地獄への下降を『歯車』に書く運命にたどり着いたのでした。芥川の地獄の叙述はストリンドベリのそれと重なるどころが多いのです。⁽³⁾ それについてこれからお話ししたいと思います。そして、スウェーデンではストリンドベリが書きつづった狂気について、それが本当にかれ自身のものであったか否かについて未だに終わりのない議論が続いています。この議論を踏まえて、今日の講義では芥川の狂気が彼自身のものであったかどうかにも言及してみたいと思います。

1

ストリンドベリは『地獄』を一八九七年の五月三日から六月二五日の間に書きました。そして、その話は一八九四年から彼がおもにパリで過ごしていた頃の経験を扱ったものです。この頃ストリンドベリは自然科学に傾倒していたため一時的にフィクションを

書くのを投げ出していました。いろいろなことに加え、彼は硫黄は元素ではないということを実証するための実験を行なったり、また錬金術にも情熱を注いでいたりしたので、実際、科学雑誌に記事を書けることもでき、科学学会からある程度認められるようになつていました。パリでは、一元論を解く“Introduction a une Chimie unitaire”（統一の化学への導入）というタイトルの論文を刊行しました。『地獄』やその同じ時期に執筆した他のいろいろな文章から考えると、彼がこの時期自然界と心霊界の隠された統一の法則を探し求めていたということは間違いないと思われます。

さて、『地獄』の主人公は誇大妄想や自己侮辱やパラノイア（被害妄想）の間を揺れ動いています。この小説は、ストリンドベリがこの時期に精神的な危機を経験し、一時的に発狂していたことの証明として取り上げられました。いうまでもなく主人公と作家を同一視する前提の上で初めて導くことの出来る結論ではありませんが。

一方『齒車』の方を見ますと、『齒車』は日付のことなる章からなっており、それによりまずと芥川は一九二七年の三月と四月にこの小説を書いたことになります。つまり、自殺をするほんの数ヶ月前ということになります。この小説は主人公の地獄のような悪夢の経験を呼び起こすもののなのです。また芥川は、ストリンドベリと似たような方法で、読者がこの話を自叙伝として認識するように努力しています。『齒車』の主人公であり

語り手である「僕」は、Aと呼ばれています。そして、文のあちらこちらに散らばっている詳細は作家の伝記の知られている事実と一致するように書かれているのです。ある場面では、「僕」は芥川自身が書いた『侏儒の言葉』という作品から、ひとつの格言を引っ張り出して、自分が書いたものと述べてさえます。「人生は地獄よりも地獄的である」(59頁⁴)と。芥川が人生の終焉に向けて深い憂鬱を経験しているということは疑う余地のない事実なのでした。それにも関わらず『歯車』に登場するいくつかの主人公の鬱状態の叙述が本当に芥川自身の物であるかどうか疑問がもたれるのです。

2

ストリンドベリの名前は『歯車』のなかで何度かあげられています。例えば「僕」は丸善の二階で『地獄』の続編であるストリンドベリの『伝説』をみつけます。その中に書いてあることが自分自身の経験からほど遠くないということを見つけるためかのようにいくつかの箇所を手当り次第に読むのです。このことからわかるように、ストリンドベリは間違いなく『歯車』の舞台裏のどこかに潜んでいるはずなのです。しかしながらこのようなはつきりした形でストリンドベリを取り上げることよりも重要なのは、否定できないストリンドベリ的性質を有した主人公の経験なのです。『歯車』と『地獄』

の二つの作品の主人公の間の最も明白な共通の特徴は間違はなく、二人ともが、「僕はこの暗合を無気味に思ひ」（79頁）と語っているということです。「暗合」とは偶然の出来事にたいしてなにか重大な意味を見つけているということです。そして、その不吉な暗合は主人公にとって、なんとなく自己の破滅の兆しのように思えます。そこで、私は本日の講演のタイトルに、この言葉を選んだわけです。『歯車』ではこの引用は主人公が自分の乗っているタクシーのドライバーが寒い日なのにも関わらず古いレエン・コオトを着ているのに気付いた場面に登場します。そしてこの雨合羽というのは、小説の最初の章は「レエン・コオト」と題されていますが、その章から不吉のサインとして登場しています。

さて、『地獄』のほうを見てみましょう。この小説にも、『歯車』と同じく、重大な意味を持つ不吉な偶然や幸運な偶然が数多く出現することに気づきます。『地獄』の主人公の役目は、あたかも関係がないように見えるものの裏側に潜む関係のしるし、つまり「暗合」を解くところにあるかのようにです。ひとことであろうと、主人公は不可思議な兆候や類似性（相応性）の解読者なのです。そういう風に、『地獄』の中のストリンドベリは、偶然ということを認めたくない、つまり、世界には偶発的な出来事があるということを手軽に認めたくはないのです。

『齒車』の主人公についても同じことがいえます。彼が住んでいる避暑地の道をほんの少し歩いている間に白黒の犬が四回とおりすぎていきます。それを見て、まず漢字の四の音読みはシ、つまり死ぬことを暗示していると思います。この縁起の悪い数字が不吉な雰囲気さをさらに高めているのです。また犬の色も主人公に地下室のバーで「ブラック アンド ホワイト」のウイスキーを頼んだときの不快な経験を思い出させるのです。ここでは地下室のバーだということに注目してください。地下室のバーという場所の設定が既に初めから暗い雰囲気を決定的にしているのです。すべての詳細がきつちりと地獄のイメージを読者に呼び起こすために組み立てられています。さらに、主人公の「僕はストリンドベリ、道で今さつきすれ違った黒と白のストライプのネクタイをしたスウェーデン人、のことを回想しています。ここでついに主人公にとって一度にあまりにも多くの白と黒が襲ってくるという感じになってしまふのです。この一連の出来事は、彼には、ただの偶然とは思えず何か違った力の仕業だとおもえるのです。

全体的にみて、『地獄』の場合も『齒車』の場合も、色は主人公にとって大変意味のあるサインとして表されています。色は幸運を運んでくる色と不吉な色とに分けられています。そういったわけで『齒車』の「僕」は幸運の緑のタクシーをつかまえる前に黄色のタクシーをやり過ぎさなければならなかった訳です。「僕」は、インクを買いに入

った店で、どのインクよりも常に自分を不快にするセピア色のインクしか見つけることができずに手ぶらのままでお店を出ることになったりするのです。そして、ここで疑いなくいえることは、『地獄』においても色は象徴的な規律を持った物として取り扱われているということです。例えば、薔薇色の寝室の壁や薔薇色のインクの例をご参照ください。

インクのところで表されているように「僕」は些細な邪魔が入ることにより平常心を失うのです。これはまた、ストリンドベリの世界を思い起こさせます。あるときホテルの階段や廊下をうろついていると、『歯車』の「僕」は突然厨房にいる自分に気がつきます。そこで白い料理帽子をかぶった料理人たちが冷たい目を「僕」に注いでいます。それがもう一度「僕」に地獄に落ちるといふ戦慄を与えるのです。しかも、この場面では刑務所のような廊下と厨房の燃え上がるかまどの炎によって地獄的な喚起が強調されます。この点で芥川の彼自身の経験からなる自伝的材料へのアプローチはストリンドベリのそれより抑制的だと言わざるをえません。といいますのは、ストリンドベリは自身自身の些細な体験をもっと誇大に潤色するからです。場合によっては、かれはダンテのインフェルノをためらいもなく呼び起こします。例えば、『地獄』の主人公が訪問中のオーストリアの村を散歩するときの叙述を例にとってみましょう。この場面ではストリ

ンドベリは自分の経験した出来事を躊躇なく大きなスケールの地獄の光景に塗り替えています。そこには天使もいれば、悪魔もおります。

付け加えて言いますと、私の解釈は芥川龍之介が実際ホテルの廊下を彷徨っていたという仮定に基づいています。同じようにストリンドベリの場合は実際彼がオーストリアの村で散歩に足を伸ばしたという仮定に基づいています。とにかくここでの仮定はこれらのエピソードは実際起こったとしても何の不思議もないということなのです。しかしながら『歯車』や『地獄』のなかの虚構の表現と、実際に作家が経験したエピソードとを等しいものとしてみることを避けた方がいいかと思われます。なぜならば、自叙伝の形で書かれている小説も結局はフィクションなのです。

それにしても、芥川の『歯車』の「僕」はいつたいてい廊下をうろうろしていたのでしょうか。この質問は奇妙な質問と聞こえるかもしれませんが。しかしながらこの答えは『地獄』におけるもうひとつの主題的特徴を認めるための助けになるのです。ある小説の原稿を書きつづけることができなくて主人公はベッドに横になり本を読み始めます。ほどなく起き上がり大きなネズミめがけて力いっぱいトルストイの本を投げつけます。ネズミは風呂場のほうにいなくなります。ネズミがどこにいったかわからずにいる「僕」はまた急に強い不吉な予感に囚われます。彼は部屋から大慌てで逃げ出しま

す。このことにストリンドベリの読者なら誰でも以前にも何度も見たような感じを引き起こされるでしょう。

こういうふうには『齒車』にも『地獄』にも主人公が逃げ出さずにはいられなくなる場面が多く書かれています。ホテルの部屋や寝室から、いろいろな建物から、または、カフェやバーから。どちらの作品も取り憑かれた主人公は四方の壁の中に自分を監禁されることに耐えられないのです。そのことが密閉空間恐怖症的な感じを読者に与えています。

そしてもうひとつ『齒車』の全体を通して繰り返し現れる顕著なストリンドベリを思い起こさせる特徴は、主人公が本を開け、手当たり次第に読み始めるところです。彼がたまたま出会う文章の行には彼個人宛ての隠された伝言が含まれていると思ひ込むのです。運命とでもいふべきものが間に入つて、ある選ばれた本の特別の一節に、彼を導いているのです。運命の裏には何かがぼんやりと見えます、それは主人公には不吉に思える別の高い次元の規律からの指示なのです。『地獄』のほうに戻りますと、主人公の目を秘密のメッセージを含んでいる特別な一節に導くために本は自ら開きさえするので。二人の主人公が偶然に耳に入れる会話のかけらについても同じことが言えます。主人公はその会話のかけらに隠れた伝言を認めるのです。

いろいろと芥川の引用の例をあげてきましたがまだまだ、芥川の『歯車』にみられるストリンドベリの作品を想わせるようなところを網羅したわけではありません。今までに述べた主題とモチーフに加え『地獄』からの借用とみられる例（パラフレーズ）をいくつか加えることを忘れてはなりません。その中には「僕」が銀座の道で出会った女性の話のように『地獄』における挿話的な類似も含まれます。遠くから見るととても美しく見えたのに近くで見るとしわだらけで醜い女性であることがわかったというものです。この女性は『地獄』で、すでに述べたオーストリアの散歩の場面で、主人公が出会う女性を思い起こさせます。この女性も同じく遠目には美しく見えますが、よくみると齒なしの奇怪な女性であったのです。

もっと具体的な借用が、はつきりわかる場所があります。『歯車』の中には、「僕」を尊敬する若者が近づいてくる場面があります。若者は尊敬をこめて「僕」を先生と呼びます。その言葉は「僕」にとって、もっとも嫌悪する言葉なのです。彼は自分がありとあらゆる罪を犯したという気持ちを持っているため、尊敬に満ちた形容で呼ばれることに、我慢ができません。そのように呼ばれることは、何ものかに嘲られていると

感じずにはいられない訳です。いうまでもなく、その「何ものか」を信仰することが神秘主義を信仰するという結論を彼にもたらすのですが。しかし、彼の「物質主義」は、「神秘主義」を受け入れることができないのです。(53頁)

『地獄』のほうに戻りますと、形而上学的な力の存在について同じような疑いを表す一節を見つけることができます。主人公はくるみが目を出すのを待っていました。最初の双葉が出たとき、彼は女性か子どもの二つの手が何かを嘆願するように彼にむかつて手を差し伸ばしている様子をそこにみます。最初彼はこれが幻想か妄想かと疑います。しかし友人にこの双葉を確かに合掌した手に見えると確認してもらったとき、彼はこの出来事の意味は何だろうと自問するのです。しかし、それにしてもあまりに疑い深く、経験主義あるいは実証主義に頼る教育に飼いならされていたため、彼はこのことを深く考えずにそのままにしておくのです。

『歯車』の「物質主義」と『地獄』の「経験主義的教育」との間で共通点が認められるというのは過言ではないはずです。両方の作品に、『地獄』から一節を抜き出せば、「出来事の抵抗できない条理をおこす見えない手の存在」の信仰と、それに対する反対の力も機能しています。そして、ストリンドベリのいう「見えざる者の手」と「見えざる力」と芥川という「何ものか」の間には、ほんの少ししかギャップはないように思われます。

『地獄』での苦悩の原因は以下の忘れたい文に示されています。「誰かが私の運命をどこかで操っているようだ。」この文は『菌車』の圧倒する不吉の雰囲気と主人公の気持ちをもよく表しています。全般的に、二つの作品を結び付けているのは機能不全の現実感という雰囲気です。現実感は、条理がもはや機能しない人生の夢的な経験に道を譲っているわけです。

4

もちろん『菌車』は真空の中で書かれたものではありません。芥川が彼の苦悩の状態に虚構の形を与えようとしたとき、彼はある特定のジャンルに頼ることが出来たのです。すなわち地獄の叙述をなすジャンルなのです。地獄のジャンルの中で、『菌車』の文学的先例として一番にストリンドベリの『地獄』を選ぶべきだということが明らかになってきたに違いありません。ついでにいつておきますと、『地獄』がまだ大きな賛美を受け始める前に、芥川はこの小説の価値を見抜いたのでした。その芥川の深い洞察力と感性を賞賛したいと思います。実際、発表当時『地獄』はスウェーデンの文壇ではおおよそ読む価値のないナンセンスとして扱われました。

そして、いうまでもなく、前に例のないような小説を書くというのはもはや不可能に

近いことに違いありません。文学の歴史は小説家が文学的な影響を他の作品から受けることと、他の作品と応答し合うという例に満ちています。ある文学作品を書くということとは、限りなく無限で多様な、他の作品と参照し合う対話に入りこむということです。すなわち、作家が書き出すとたん、その文章は既存の文章との関係の中にいきなり複雑なかたちで巻き込まれてしまうのです。といった訳で、『齒車』と『地獄』が類似しているということは他にも見られる当たり前のことで、それ自体は私たちの注意を引くものではないのです。このケースを特別の興味深いものとしているのは、一般に自叙伝を読むときに適用される読み方が今回はフィクションに適用されているという事実なのです。それは一般の読者について言えることだし、芥川についても言えると思います。この読み方によれば自叙伝的文章は生の体験を正直に表した真正正銘の信用できる文書として扱われます。たしかに、自叙伝的小説と実際の出来事は混同してはならないということが普通は主張されます。批評家の間でも自叙伝的文は正確さという点に注意して読まなければならないという意見で一致しています。実際には、このように普通にいつているにもかかわらず、多くの批評家そして一般の読者においてはいうまでもなく、虚構の文を作家の信頼できる告白として使い続けているのです。この傾向は日本において少なからず見ることが出来ます。私たちが今見ているのはストリンドベリと芥川の受け入

れ方なのです。しかし、これは作家の方が読者に期待する、または計算する受け入れ方にも関係してくるのです。文壇のスターになるため作者はいうまでもなくこの文字どおりの読み方を利用して自分のキャリアのために使っているということは否定できないのです。

5

芥川の場合においては、彼がストリンドベリを読む場合に多少とも、そこに書かれていることをそのままストリンドベリ自身の体験と信じこみ、フィクションの主人公とその作家その人を混同していたであろうと信じる理由があります。このような彼の態度は、既に述べた『侏儒の言葉』という遺稿となったアフォリズム集から抜き出した以下の文から窥えます。

二つの悲劇

ストリントベリーの生涯の悲劇は「観覧随意」だった悲劇である。が、トルストイの生涯の悲劇は不幸にも「観覧随意」ではなかった。従つて後者は前者よりも一層悲劇的に終つたのである。

ストリントベリイ

彼は何でも知つてゐた。しかも彼の知つてゐたことを何でも無遠慮にさらけ出した。何でも無遠慮に、——いや、彼も亦我々のやうに多少の打算はしてゐたであらう。

又

ストリントベリイは「伝説」の中に死は苦痛か否かと云ふ実験をしたことを語つてゐる。しかしかう云ふ実験は遊戲的に出来るものではない。彼も亦「死にたいと思ひながら、しかも死ねなかつた」一人である。⁽³⁾

芥川はここで明らかにストリントベリの自叙伝的小説、すなわち『伝説』の外に『痴人の懺悔』、『女中の子』、『地獄』を引き合ひに出しています。もちろんこれらの作品はある程度までストリントベリの人生の出来事に基づいています。そしてもちろん芥川はストリントベリの告白に打算の要素も混ざっていると注意を払っているのです。しかしそれにもかかわらず、芥川は基本的に、虚構として書かれた叙述を實際の体験というふうに読んでいます。例えば、ストリントベリが「死の実験」を實際行なつたかどうかは、知る由もないはずです。

芥川自身はこういつたことについてあまり気にしてはいなかったのではないかということ述べておくべきかと思ひます。そのことは『私』小説論小見に示されています。その中で芥川はつぎのように断言します。作者は結局、自分の心の中に既に存在していたことだけを表現できると。例えばもし、ある作家が私小説の主人公について自分自身は持つていない（親）孝行の美德の性格を与えれば、道徳的にいえば、作家は嘘をついていると言うのは当たっているかもしれません。しかし、「こう言う主人公を具えた或『私』小説はまだ表現されない前に既に彼の心の中に存在したのでありますから、彼は嘘つきどころではない」といふことになります。「唯、内部にあつたものを外部へ出して見せただけであります」と。この意味において芥川は私小説家にカルトブランシユ（白紙委任状）を与えたと言へるでしょう。それでも、芥川も含めて当時の読者は、ストリンダベリという作家は「冷酷な懺悔」を自分のトレードマークにしたり、自分の生活や危機を小説の材料を得るために演出したりした作家だと認めていなかったのは事実なのです。つまり彼は計画的に狂気を装ふことによつて自分の周囲を操つたわけですから。という訳で、芥川が私小説家にカルトブランシユを与えたときに、かれはおそらくストリンダベリのような、狂気を装いそれを材料に作品を書くといったような作家を想定してはいなかったはずですから。これはあくまでも、私小説と誠実さとの関係の議論に関する

私の分析にすぎないのですが。いうまでもなく、何を書くかは作家のみに委ねられているのですから。

6

ここで、芥川のストリンドベリの読み方にまた戻ります。興味深いことに芥川の読み方はスウェーデンやほかの国で確立されているストリンドベリの受け入れ方と一致するのです。つまりストリンドベリが作家のキャリアに乗り出したとき以来、文学史家、批評家、精神病医学者、そして読者や一般の人々は彼のことを狂気扱いしつづけていました。芥川もそのことを感じた一人だった訳です。ストリンドベリが今日でも他の作家を抜いて輝くスウェーデンにおいて、ストリンドベリが確かに狂気だったという強く根付いた確信あるいは神話があります。ストリンドベリの文を一行も読んだことのない人でさえ彼が狂人だったことだけは知っているのです。それに加え、二十世紀の初めから今までストリンドベリのケースは精神病医学界の注意を引き続けています。診断はたいいていの場合、彼のフィクションである小説、日記、手紙や彼を知っていた人や会ったことのある人たちの証言に基づいています。しかし外国の研究家の研究の場合には、ほとんどの場合ストリンドベリの小説だけに頼っているのです。という訳で『地獄』から導き

出された結果は、この作家は躁鬱病、精神分裂病、被害妄想などの影響下にあると診断されるのです。実際一九五六年にストリンドベリのカルテを調べたドイツの精神病医学者はストリンドベリが死後に少なくとも三十六種の病状を診断されていたことを発見しました。二十世紀のはじめにはストリンドベリの書いたものは完全に自伝であったという当時の仮説に拍車をかけられたドイツの精神病医学者たちによって行われたストリンドベリに関する研究がたくさんあります。当時の精神病医学界では、小説を分析しさえすれば、その作家の精神を分析しえたことになっていました。自叙伝や告白文のスタイルの小説では、なおさらその作家の経験がそのまま出ていると考えてしまうのでした。つまり主人公は作者自身そのものとは限らないということはこれらの科学者にとつては何も考えが及ぶところではないのです。とくにストリンドベリについては、これらの傾向がはなはだしかったのです。シーグフリッド・ラーマーという精神病医学者はいとも簡単にストリンドベリの作品は彼の感情の反映によって構成されたものだとして結論しています。つまり彼の作品は彼の感情をそのまま反映しているという考えですからストリンドベリは精神分析者にとつて格好の都合のよい患者になるわけです。

しかしながら、後になってスウェーデンの精神病医学的研究がストリンドベリをはつきりした精神病として診断することに気が進まない姿勢を見せていることを、ここで述

べておく必要があるでしょう。彼らの研究がかわりに提案しているのはストリンドベリは多分一時的な被害妄想症にかかっていたのではないかという事です。

7

ところが、一九七九年には著名なスウェーデンの文学史家であるオロフ・ラーゲル克蘭ツがストリンドベリの伝記を刊行しました。この伝記はたいへんに注目され、批判とともに多くの賞賛も受けたのです。もともと議論になったのは『地獄』を取り扱った章です。この章でラーゲル克蘭ツはストリンドベリのいわゆる「地獄の危機」をラディカルに解釈しなおしたのです。彼は『地獄』も含めてストリンドベリのすべての自叙伝として主張されている作品は、まず作られたフィクションとして理解しなければならぬと主張したのです。

しかし、もし『女中の子』と『痴人の懺悔』が絶対的な自叙伝的材料として信頼性がないとすれば、『地獄』はもつと信頼性がないということになります。この本はその頃のストリンドベリの生活を表す材料としては全く使いものにならなくなります。ちょうど『懺悔』に見られるように詳細は事実にとまっているのですが、全体

的な像が偽物なのです。「偽物」といつてはあまりにも強い言葉に聞こえるでしょう。『地獄』は内面的な真実を所有していて、いつの時代にも人間の偉大な文書としてみられるでしょう。しかしその中心人物、ストリンドベリは私たちが今の伝記で扱っている人物と同一ではないのです。彼は虚構の人物なのです。⁽⁸⁾

つまりラーゲルランツがしたことというのは、ストリンドベリにまったく健康だという証書をあたえたということなのです。ラーゲルランツはストリンドベリの一八九四年のパリ旅行の目的が自分のキャリアを高めるため、文学でも、科学の面でもヨーロッパの文化の中心であるこの街を支配することだったことを強調するのです。その目的達成のためにかれは自分自身の周りに騒ぎをおこし最新の文学の流行を自分のものにしないといけなかった訳です。彼は文学の前衛の地位、できれば前衛を率いる地位を確立する必要があったのです。当時の先端の動向にあわせるために彼は自分の作品の看板を変えたのでした。『令嬢ジュリー』は彼が数年前に自信を持って史上最初の自然主義派の戯曲として出したものです、しかし今では象徴主義の劇になったのです。ストリンドベリは過去の人という風に見られないために、当然ながら自然主義派から遠ざからなければならぬと感じたのでした。そして、ラーゲルランツはツルゲーネフやヘ

ンリー・ジェイムズとはいかないまでも、ストリンドベリはフランスの文化人のエリートの周辺に輝く星のひとつになることに成功したということです。しかし、パリで人々の注目を集めていたのは彼の芸術的技術ではなく、エキゾチックな特徴や過激な意見といったことで、北欧の粗野な天才というストリンドベリのイメージに相応しいものに限られていたともいっています。「女性の男性性に対する劣性」、これはストリンドベリが書いた突飛な悪名高い記事のひとつです。一八九五年の一月、この話題のために、数週間の間、街中がストリンドベリのことを話題にしたのです。

『地獄』の計画の形が出来上がってきたときストリンドベリはそのころの流行だった神秘主義にのめりこみ始めました。友人への書簡に彼はこう書いています「あなたはこの間、オカルト〔神秘主義〕のゾラが必要だと言っていました。私はその要求を聞き入れた、壮大で高尚な意味で。『地獄』という散文詩だ⁽⁹⁾。ラーゲルクランツによるとストリンドベリは書く材料を集めるためと、天才的狂人としての自分の自画像を誇張するために、恐怖症や過度の発想を意識的に育んでいたということです。このラーゲルクランツの指摘によれば、ストリンドベリは他のいろいろなことに加えて彼の潜在的な被害妄想を大げさにあらわし、すすんで生け贄の羊の役を請け負ったということです。したがって、彼の前に立ちはだかる出来事と偶然の無限の組み合わせの背後に支配者の手を想像

したりするのです。不可解な一致と調和の背後で作用する統一の力を探し求める者、それがストリンドベリという『地獄』の主人公なのです。ラーゲルクラントはストリンドベリのいわゆる「地獄の危機」を理解するための鍵を与えてくれます「ストリンドベリは内部の耳で聞いて自分の空想と夢に現実性を与えたのですが、それを外部の生活の事実と混同しませんでした⁽¹⁰⁾」。ストリンドベリが、狂っていないかったというラーゲルクラントの主張の多分一番大きな論点は、手紙などから判断すれば、問題の時期のストリンドベリの言葉を扱う能力と知性はずっと正常のままであったという点です。それは彼のドラマがクライマックスを迎えているはずだった時においてもそうなのです。

8

さて今度は、芥川の方に目を向けてみましょう。私は芥川がストリンドベリの小説を自叙伝を読む方法で読んだという議論をしてきました。このことを証明するのは簡単なことではありません。私は芥川ほどの読者がストリンドベリを表面的な方法で読んだに違いないとか、彼を誤解したに違いかいっているのではありません。また、芥川はストリンドベリを自叙伝として読んだことによる影響についてのこれといった文を残している訳でもありません。どちらかといえば、芥川の文章を全体として考慮した結果、

この結論に及んだのです。純粹な審美的評価を超越した感動を芥川がストリンドベリから受けたと何となく思われるのです。芥川のストリンドベリについてのいろいろなコメントを調べますと、かれがストリンドベリの人生のドラマに強く心を動かされていたということが感じられます。つまり、もし彼がストリンドベリの作品を純粹な虚構、フィクションとして読んでいたとしたら、このほとんど考えられないような形で感動を受けてはいなかったはずです。芥川はストリンドベリの仲間として、苦悩の魂の所有を認め、芸術家としても一個の個人としても自分と同一とみなしたのだということを私はいいたいのです。

さて私のお話も一番大事なところにさしかかってきました。もう一度この講義の目的を思い出してください。それは自叙伝の形をとったフィクションを文字どおりの自叙伝として読む時の結果、およびその影響を吟味することでした。芥川とストリンドベリの交点はこのようなことの分析の格好の例になります。

『齒車』の芥川は発狂することを死ぬほど恐れています。話の中で、彼はある精神病院に電話をかけようとしています。そこにはいるということが彼にとつては死と同じことを意味するという事に気づき気が変わります。実際芥川の母は彼が一歳になる前に発狂していて、芥川は成長していく過程で母の病が遺伝性であつたらどうしようという恐

れにつきまとわれていたのです。それにもまして、芥川は実際、半透明の菌車の幻影に悩まされていたのでした。その菌車は次第に数を増し彼の視野を半ば塞いでしまうのでした。このことは仮想ではない証拠で裏打ちされています。結果的には、苦悩する魂が深く感じた証言としての『菌車』の一般的な真実性を疑う理由はないでしょう。(ついでにいつておきますと、一般に作品の評価に關していい評価を得るためには、その作品は誠実な心情を表してはいけないとか、経験に基づいた真実でなければならぬなどといっている訳ではありません。) どちらにしても、ストリンドベリの文学的喚起に關わらず、つまりストリンドベリのまねの要素も若干關わってくるにも關わらず、私たちは芥川の落ち込みを事実として考えてよいでしょう。

一九二七年七月二四日未明、芥川が致死量の睡眠薬を飲み込んだとき、彼は友達宛に遺書のようなものを書簡の形で残しました。その中でかれは「何か僕の将来に對する唯ぼんやりした不安」のことを語っています。⁽¹⁾ 自尊心の強い作家が自殺をするという先例がある日本においても、芥川は神経衰弱の限界で苦しむ芸術家のイメージを背負っているのです。彼の死はまた、この時代の魂と一つの時代の終わり、つまり大正時代の終わりを象徴しているのです。芥川の文学に限らず、芥川その人についての読者のイメージも、ある意味で近代日本の自己認識にはいったと断言しても間違ひはないと思え

ます。なぜならば、日本には、『齒車』のような作品を自叙伝的に読むという用意ができていたからです。つまり、作家と主人公を同一視して読む準備ができていたのです。確かに批評家は『齒車』はまずはフィクションとして理解すべきだと議論しています。しかしながら、特に日本では二十世紀初期に私小説の強い影響があつて、自叙伝的フィクションを文字どおり（作者の実験の経験として）に受け止めるという傾向があります。つまり芥川は、夏目漱石のような、ある意味では近代化の犠牲とでもなった作家とともに、近代性の悪い意識として日本人の自意識のどこかに居残っているのではないでしようか。したがって、芥川の特定のある苦悩が少しでも日本の精神に影響を与えたと推測するのは大げさなことではないはずです。

むすび

既に見てきましたように『齒車』に表される芥川の苦悩はストリンドベリのそれに吹き込まれた点があります。もしそうだったとしたら反対にストリンドベリの苦悩は何なのでしようか、誰に吹き込まれたものでしようか。よく知られたメタファーによりますと、ちやうど真珠がアコヤガイの中のはいったゴロゴロする砂粒から自分を守ろうとす

る時にできる異常の産物であるように、芸術家の偉大な作品は病んだ心の賜物だといわれます。十九世紀の終わりにはヨーロッパでは天才と狂気の違いは紙一重だという信念の全盛期でした。そうであれば、すばらしい知性の才能に必要なものは異常な精神状態であるといえるでしょう。この風潮はブルジョアの正常さに対抗するボヘミア文化の出現によつて拍車をかけられたのでした。現代芸術がブルジョアによつて狂気と診断されるときにも、狂気というものも社会への反逆の文化として何か願わしいものとしての地位を得たのでした。混乱した感情の動きを経験することは狂ったという印であるのみならず芸術的才能と見られたのです。狂気が精神の市場での流行の商品となった訳です。ストリンドベリは意識的に文学の枠組みの中でのみならず私的な生活でも狂人になる準備をすることによつてこの流行をどのようにして自分に優位な方向にするかを知っていました。彼は神秘主義を肥やしとして狂気のイメージを育んでいったのでした。

このように我々はストリンドベリのいわゆる狂気における歴史的、なおかつ文化的背景を確認しました。芥川は多分気づかずに神秘主義思想や半狂気の人と天才といったイメージをストリンドベリを通して受け入れたのではないかということ述べておきたいのです。もつといえ、このストリンドベリより芥川への路は、このようなヨーロッパの近代的な考えが日本へはいつてきた通路の一本であることを述べておきたいのです。実際、

芥川はストリンドベリを近代精神の代表者として見なした発言が残っています、

読んだ本の中で、義理にも自分が感服しずみられなかつたのは、何よりも先ストリントベルグだつた。その頃はまだシエリングの訳本が沢山あつたから、手あたり次第読んでみたが、自分は彼を見ると、まるで近代精神のプリズムを見るやうな心もちがした。彼の作品には人間のあらゆる心理が、あらゆる微妙な色調の変化を含んだ七色に分解されてゐた。いや、『インフェルノ』や『レゲンデン』になると、怪しげな紫外光線さへ歴々としてそこに捕へられてゐた。¹²⁾

しかし、このような結果がどうして自叙伝的読み方に依るのでしょうか。繰り返していうならば、第一に、もし芥川がストリンドベリを自叙伝的に読んでいなかつたら、彼はあんなに強烈にストリンドベリの人生のドラマに感動していなかつたでしょう。そして次には、もし強く感動していなかつたら自分の苦悩をあのような文字どおりの意味で『齒車』の中でストリンドベリのそれと並べる必要性を感じなかつたでしょう。簡単にいえば、私たちの知る『齒車』はなかつたことになるでしょう。

告白文のジャンルは複雑なシステムの変装やベールによつて成り立っています。その

背後で真実性あるいは信頼性の概念がつるつる滑る石鹸のように手の間をすり抜けてしまふのです。私にとつては『齒車』はストリンドベリ風に書かれた芥川の自画像に外ありません。また、ヨーロッパに出現した狂気の天才の信仰が『齒車』の中に投射されていることを認めることが出来ます。私の意見では、このケースはどのようにヨーロッパの世紀末の考え方が近代日本人の自意識に入り込んだかという確固たる例を見せてくれると思うのです。

これは近代化あるいは西洋化の実現以外の何物でもありません。もし、近代化に対する抵抗の文化も近代化の一部であるならば。

注

(1) ストリンドベリ、アウグスト『地獄』、『世界文学全集、ストリンドベリ篇』第二十巻に所収、河出書房、一九五二、三四七頁。

(2) 日本近代文学館所蔵。

(3) このことについて、既に例えば次のような堀辰雄の指摘がある、「そうしてその中の『齒車』エピソードの一つ一つが彼の『何か知らないもの』(彼がそれを『復讐の神』と呼んだもの)に対する恐怖で直線的に貫かれている。そのために、又その作品は、我々読者をして、一つ一つのエピソードで戦慄させながら、その戦慄の連続の中に一貫せる恐怖を呼び起こさせるのである。かかる

恐怖をもって彼以外の誰が我々に迫ったか？それはやはり彼と同じように、『何か見えないもの』によって病的に苦しめられた二瑞典人アウグスト・ストリンドベリイあるのみである。この瑞典人の書いた『地獄 (Inferno)』のみが彼の『歯車』の恐怖を思い出させる。」「芥川龍之介論」『堀辰雄全集』第四卷に所収、筑摩書房、一九七八、六〇一―六〇二頁。

- (4) 『歯車』からの引用は、『芥川龍之介全集』第十五卷、岩波書店、一九九七参照。
- (5) 『侏儒の言葉』(遺稿)、『芥川龍之介全集』第十六卷に所収、岩波書店、一九九七、七四頁。
- (6) 『私』小説論小見、『芥川龍之介全集』第十三卷に所収、岩波書店、一九九六、二四頁。
- (7) ストリンドベリと精神病医学界との関係についての叙述は Ulf Olsson, *Jag blir galen* に基づく。
- (8) Lagercrantz, Olof. August Strindberg. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1984. 116-117頁。
- (9) 同前、二七七頁。
- (10) 同前、二七六頁。
- (11) 「或旧友へ送る手記」、『芥川龍之介全集』第十六卷に所収、岩波書店、一九九七、三頁。
- (12) 「あの頃の自分の事」(削除分)、『芥川龍之介全集』第四卷に所収、岩波書店、一九九六、一四四―一四五頁。

参考文献

Gavel Adams, Ann-Charlotte. "Kommentarer." August Strindbergs Samlade Verk 37, *Inferno*. Stockholm: Norstedts, 1994.

Lagercrantz, Olof. *August Strindberg*. Stockholm: Wahlström & Widstrand, 1979.

Olofsson, Tommy. "Strindberg och den klädsamma galenskapen." Svenska Dagbladet, 19.10, 2002.

Olsson, Ulf. *Jag blir galen: Strindberg, vansinnig och velenskapen*. Eslöv: Brutus Östlings Bokförlag Symposium, 2002.

発表を終えて

スウェーデンにおいてストリンドベリーは死後約100年たった現代においても、尊敬されかつ身近に感じられる作家です。日本における芥川が存在に近いところがあるかと思われます。この二人の作家の接点を語り方の方法ということに焦点をおいた私の発表が、聞いて下さった方々に何らかのインスピレーションを与えることが出来たとしたら、私としてはまず大変好運に思います。

私の講演の主題は、15年前に初めて『齒車』を読んだ時から燃り続けていたものです。私が興味を抱いたのは芥川の狂気とストリンドベリーの狂気の類似性です。特にストリンドベリーの狂気はつくられたものだという意見があったのに対し、芥川のそれは本物だと理解されていたからです。そういう訳でこのフォーラムは、スウェーデン以外ではあまり知られていないストリンドベリーの狂気についての論争を紹介する場として最適だと思いました。私の講演を科学的な分析としてではなく、随筆のように、あるいは個人的な視点に基づく創造物として理解していただいたとしたらうれしく思います。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ヤン・シンコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	D U Q i n 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知兎 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マ リ ア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑮	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑯	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑰	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑫	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬⑭	12.11.14	SHIN Yongtae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑮	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑯	13. 4.10	L.I Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑰	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④①	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
⑭④⑤	13.12.11	チグサ キム ラスティーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカ文化の中の女と男」
⑭④⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭④⑦	14. 2.12	マシミリアーノ トマシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マツシュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学の生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑫	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑬	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

①60	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鎰烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神が出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
①69	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩⑦①	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑩⑦①	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リ ビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノー ス Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴェイーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑩⑦⑦	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『菌車』、ストリンドベリ、そして狂気」
178	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国大学生が見た日本のテレビドラマをめぐる—」
⑩⑦⑨	17. 4.12	ノエル ジョン ピニングトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マ ク マ レ ン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
182	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2005年8月1日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

©2005 国際日本文化研究センター

■ 日時

2005年 2 月 8 日 (火)

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

アーバネックス御池ビル東館

七回 僕はこの暗号を不味に思ひ、芥川龍之介「幽霊」を讀んで、又「復讐」を讀んで、力比多の國籍日本文化研究所に電話して、